

## ■ 提 言 ■

## COVID-19 流行下における 子どものウイルス感染症を考える

齋藤 昭彦

新潟大学大学院医歯学総合研究科小児科学分野

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミックが始まり、はや3年、小児感染症・免疫を専門とする医師の仕事の役割は、院内の感染制御の仕事にとどまらず、特に第7波以降は、患者の急増による小児患者の診療、2022年から本格的に始まった小児を対象とした新型コロナワクチン接種、COVID-19やワクチンなどの正しい情報を伝えるための啓発活動など、その仕事は多岐にわたり、多忙を極めた。私のこの3年間は長かったようで、あっという間の時間の流れであったが、皆さんは、どのような3年間をお過ごしになられたであろうか。この間、会員の皆様の子もたちをCOVID-19から守るためのご尽力に心からの敬意を表したい。

パンデミック初期は、徹底的な飛沫・接触感染対策によってCOVID-19以外の子どもの感染症は激減し、これまで季節性にみられていた子どものウイルス感染症は完全になりを潜めた。これは、子どもたちにとって、大きな福音であったわけであるが、同時に、それぞれの年代で各々のウイルス感染症の感受性を増加させた。代表的な例は、翌年の2021年に九州地域から流行が始まり、全国に感染が拡大したRSウイルス（RSV）である。特記すべきことは、RSV感染者の年齢は通常のシーズンでみられる年齢よりもより高く、また、感染者数のピークの時期はより早く、また患者数もこれまでのシーズンと比べもっとも多かった。COVID-19の感染対策によって減少していた

RSV、これまでにないパターンで感染が起こったため、パリビズマブなどによる予防策を立てるのがより難しくなり、多くの新たな課題が浮き彫りになった。

2022年に入ると、人の流れがより活発になるにつれて、他のウイルス性感染症の流行も徐々にみられるようになってきた。冬季になると、南半球で流行したインフルエンザも2年ぶりに流行し始め、COVID-19との同時流行への懸念が高まっており、国内でもその対策が議論され、情報が発信されている。

ウイルスの同時流行を規定する因子は何なのか！これまでも、国内の小児のインフルエンザの流行は、RSVの流行が終わるにつれて始まるのが通例であった。ウイルスには多くの種類があり、それぞれのウイルスは人の異なる自然免疫によってコントロールされている。あるウイルスが流行するとそれに対する一定の自然免疫が活性化され、同じ自然免疫で制御されるウイルスは抑制され、一方で、異なる自然免疫で防御されるウイルスは増殖するという仮説が成り立つ。

ウイルス学の進歩は、それぞれの領域で目覚ましい発展を遂げている。ヒト免疫不全ウイルスやC型肝炎ウイルスなど、異なるメカニズムを持った有効な抗ウイルス薬の開発に成功した領域では、ウイルス感染症を確実にコントロールできる時代となった。一方で、個々のウイルスではなく、ウイルス同士の共存、1つのウイルスに感染した

後の自然免疫が他のウイルスにどう影響するのか、データは極めて限られている。

今回の COVID-19 のパンデミックを経験し、1つのウイルスの世界的な感染が広がる中で、他の小児のウイルス感染症は今後、どうなるのか、目の離せないところである。それぞれの感染症の平時からのサーベイランスは当然重要であるが、共存するウイルス同士がどのような Cross Talk を

しているのか、そして、1つのウイルス感染に対する自然免疫が他のウイルス感染にどのように影響するのか、そしてその持続期間など、多くの解決すべき課題が浮き彫りとなった。新しくみえてきたこの領域は多くの重要な研究テーマがある。

日本小児感染症学会の活動を通じ、この領域の問題解決に迫る研究成果が出てくることを期待したい。

\* \* \*